

この4月より客員研究員としてキリスト教研究所に関わらせていただくことになりました。よろしくお願ひ申し上げます。こんにちに至るまで明治学院とは、私にとって重要なご縁がいくつかありました。そのうち三つをご紹介しますのであります。

明治学院という学校のことを私がはっきりと意識したのは、1995年6月のことでした。ニュース番組で、当時の学院長中山弘正先生が『明治学院の戦争責任・戦後責任の告白』を読み上げられる様子を取り上げられていました。その真剣な言葉を聞きながら大きな衝撃を感じたことを覚えています。

1995年は激動の年でした。宗教的な側面而言えば、3月にオウム真理教による地下鉄サリン事件がありました。人間のエゴと弱さが宗教の外観を装っていかに大きなマイナスのエネルギーを生み人々を傷つけ得るかを、私たちは目の当たりにしました。また、犯人の中には“良い”高等教育を受けた人々が多数含まれていました。サリン事件は、日本の教育のひずみが噴出した事件でもありました。宗教と教育に対する不信感と猜疑心が日本の社会においてあれほど増大していた年は、近年では他になかったのではないのでしょうか。

このような中での、明治学院の戦責告白でした。宗教は人を盲目にするだけのものではなく、むしろ人が目をつぶってしまいたいような深い罪の現実に目を向けさせるものであること、また罪の現実の中にあってもなお人に普遍的な善を見据える力を与えるものであること—こうしたことを明治学院の告白は私に教えてくれました。また、こうした取り組みが一個人の力だけでなく教育に携わる団体

の総意として行なわれたことも、とても意義深いことと思えました。私は当時教会に通い始めたばかりでしたが、キリスト教も共有する宗教の負の側面にもかかわらず、キリスト信仰の善き力を信じることができたことには、明治学院の告白も大きな影響を与えてくれたと思います。私は同年のクリスマスに洗礼を受けました。また後年、留学中のことでしたが、明治学院の戦責告白をきちんと勉強したいと思い立ったときには、中山先生に大変親切に詳しくご教示いただきお世話になりました。

明治学院とのご縁の二つめは、私が洗礼を受けた母教会の歴史にあります。母教会はキリスト同信会という無教会系の教会ですが、昔の伝道者に乗松雅休（1863-1921）という人がいます。どんな組織からの支援も受けずに、朝鮮半島で朝鮮の貧しい人々と同じ食物を食べ同じ着物を着ながら、伝道に力を尽くしたそうです。伝える相手と同じ立場・目線に立って伝道した姿は、現在でも同信会で尊敬され続けていると同時に、乗松を通じて始まった韓国教会との交流は現在も続いています。乗松は一時期明治学院に籍を置いたと言われています。

三つめの明治学院とのご縁は、とても個人的なことになってしまいますが、義母を通じてのものです。義母は高校を出たあと単身で上京し苦学した人ですが、1956年頃松原教会にて賀川豊彦より洗礼を受けました。その後、賀川の勧めにより明治学院に入学して学びました。結婚後は専業主婦となりましたが、全盲の夫を支えつつ子どもたちを育てました。視覚障害者にとって高等教育の機会や職業選択の幅が大きく制限されていた時代に、義父が最終的に博士号を取得し後進の人々にも道を拓いたことには、義母の助力が欠かせなかったことと思います。また義母は地域で様々

な活動や人との繋がりを大切にしています。義母の生き方や活動は社会の注目を集めるようなものではなかったかもしれませんが、賀川や明治学院の精神を受け継いだものではなかったかと思います。

4月からのまだ短い関わりですが、明治学院では各先生方が明治学院の伝統と精神を大切にされていることをひしひしと感じています。私もこの善き伝統と精神に学ばせていただきたいと願っております。

（しまだ ゆき 客員研究員）

